

# 中華民国教育部第一次全国美術展覽会出品日本洋画について

——近百年來中国絵画史研究 八——

鶴田武良

はじめに

日本出品の経緯

資料 「中華民国教育部美術展覽会日本出品目録」

付載一、「中華民国大学院美術展覽会規章」

付載二、「教育部全国美術展覽会徵集出品細則」

はじめに

「民国期における全国規模の美術展覽会——近百年來中国絵画史研究 一」<sup>(1)</sup>で、一九二九年四月、上海で開催された「教育部第一次全国美術展覽会」について、その開催経緯、内容を述べ、展覽会終了後に刊行された図録『美展特刊・今部』<sup>(2)</sup>に、「外国作品」として和田英作「人体」、石井柏亭「雀牌」、満谷国四郎「人体」、和田三造「人体」、寺内万治郎「人体」、梅原龍三郎「人体」の六点の図版が掲載されていることを紹介した。

同稿執筆の時点では、日本からの出品に関しては『美展特刊』が唯一の資料であったため、六人の出品について触れただけであるが、日華絵画聯合展覽会の調査に関連して、教育部第一次全国美術展覽会（以下、教育部美展と

略称）に日本が出品するに至った経緯を伝える外務省外交記録を見ることができ、さらに日本出品の全作品の図版および目録を掲載した『中華民国教育部美術展覽会日本出品画冊』を披閲することができた。その二つの資料をもとに、本稿ではまず日本からの出品経緯について述べ、次に出品目録を公開し、稿末に「中華民国大学院美術展覽会規章」および「教育部全国美術展覽会徵集出品細則」を付載した。

## 日本出品の経緯

前掲拙稿執筆のときは未調査であった上海の新聞『申報』について、一九九九年七月から二〇〇一年十月にかけて、共同で『申報』一八七二年—一九四九年所載美術関係記事・広告総索引<sup>(3)</sup>（仮称）を作成する作業を行い、教育部美展に関する多くの資料を得ることができた。本稿では、はじめに前掲拙稿発表後に得た資料をもとに、教育部美展について前稿の補訂をかねて概略を記しておきたい。なお、教育部美展の詳細については、本誌三百四十九号所載拙稿を参照していただきたい。

民国期中国で、最初に全国美術展覽会の開催を提唱したのは劉海粟<sup>(4)</sup>であ

る。一九二五年（民国十四）八月、山西省太原の山西大学で開催された中華教育改進社の第四次年会で、劉海粟と李榮培が主席を務める美育組分会は、劉海粟提案による①全国美術展覽会開催案、②国民美術館開設案、を通過させた<sup>(5)</sup>。この開催案をもとに美育組は全国美術展覽会委員会を組織し、同委員会は八月二十日、山西大学で第一次談話会を催し、「明年（一九二六年）武昌で第一回展覽会を開催すること」を決定した。しかし、同委員会による開催にはその後支障が生じたらしく、進捗を見ないまま、全国美術展覽会開催案は大学院（一九二七年十月一日、教育部を改称）に引き継がれたようである。

一九二七年（民国十六）十一月二十七日、発足間もない大学院は上海馬斯南路（現、思南路）で大学院藝術委員会第一回会議を開き、①全国美術展覽会の開催、②国立藝術大学の設置などを決議し、全国美術展覽会については開催時期を一九二八年夏季休暇中、会場は別途協議すること、籌備委員会を南京に設置することとし、美術展覽会予算案を通過させた<sup>(6)</sup>。翌一九二八年二月二十六日、大学院藝術教育委員会は上海霞飛路（現、淮海中路）の国立音楽院で院長蔡元培のほか、張繼、周峻、林風眠、蕭友梅、李金髮、李重鼎、王代之の八委員が出席して第三次常会を開き、新たに陳樹人、唐家偉を委員に迎えること、藝術委員会を西湖国立藝術院に移すこと、大学院美術展覽会を「暑假開学前」に上海で挙行すること、などを決議した<sup>(7)</sup>。

一九二八年五月十五日から南京の国立中央大学で開催される全国教育会議に向けて、劉海粟は五月十一日、『申報』に「挙弁全国美術展覽会案」を発表し、人類が歴史上、新紀元を画すときはすべて精神の戦闘を経てからであった、藝術活動は人類の精神生活においてもっとも豊かな創造活動であり、人類精神の自然な発露である、欧州では文藝復興以来、新文化は藝術にあると述べたのち、次のように説いた。

……当今、わが国民は新文化を口にし、外来思想を受け入れているが、しかし、その目標は不明であり、その選択も不審で、その結果、産業主義、理知主義に偏ることになった。ついに国民は機械に束縛され、物に圧迫され、金錢に使役されるところとなり、人性本来の自由を失ってしまった。そのため社会の不安、混乱状態はむかしのままで、まことに嘆かわしい。それを救う策は審美文化を唱導することにある……世界各国には国家の美術展覽会、あるいは団体、個人の美術展覽会があり、政府が先に奨励し、後から国民が奮って続いている、審美教育の影響の及ぶことの速やかなこと、風電のごとくであるのは理由がないのではない。近ごろ、わが国民は藝術の重要なことは知っているが、しかし、その重要さの理由についてはまだ漠然としている。だから作者は古いしきたりに閉じこもって進歩を求めようとせず、鑑賞者は認識力が弱く、朱を見て青としているが、これは審美教育上の大欠陥である。この欠点を救うには、努力して民衆の藝術教養を高めなければならない。民衆の藝術教養を高めるためには、大規模な美術展覽会に勝るものはない。すなわち全国美術展覽会の開催を猶予できない理由である。大学院が毎年全国美術展覽会を挙行して、油画、国画、彫刻および工藝美術を募集し、定期的に首都および各大都市で開催することを要請する<sup>(8)</sup>。

大学院藝術委員会は一九二八年六月三日、上海の国立音楽院で開催した第四次常会で「美術展覽会具体弁法」を討議し、次のことを決議した<sup>(9)</sup>。

- 1、大学院院長が美術展覽会会長を務めること、藝術委員会秘書が美展秘書を務めること
- 2、準備委員会主任は楊杏佛が就き、同会に次の小組をおくこと

甲…文書事務組（大学院が担当する）

乙…徴集組

主任・高樂宜

委員・徐悲鴻、張聿光、俞寄凡、朱應鵬、丁衍庸、陳抱一、周勤豪、

李金髮、王一亭、李毅士、李超士、黃懷英、黃賓虹、陶元慶、許

敦谷、程瑤笙、高劍父、高奇峯、楊左甸、劉海粟、孫世瀨、鄭曼

青、洪麗生、唐家偉、姜丹書、傅菩禪、邱代明、陳宏、国立音楽

院、国立藝術院

丙…出版宣伝組

主任・孫伏園

委員・林文錚、孫福熙、朱應鵬、田漢、李金髮、梁得所、李朴園

丁…指導組

主任・劉既漂

委員・吳大羽、王子雲、孫福熙、張聿光、邱代明、陳宏、雷奎元

3、審査委員会に次の委員を委嘱すること

主任・林風眠

委員・張靜江、張溥泉、陳樹人、周峻、齊白石、徐悲鴻、吳大羽、劉

既漂、李金髮、蔡威廉、孫福熙、潘天授、呂彥直、李毅士、王

亨、張聿光、李超士、林文錚、高樂誼、張道藩、黃賓虹、王子雲、

張光、呂澂

4、会場は国立交通大学および中法国立工業専門学校（ともに上海所在）とすること

5、開催時期は八月十五日から九月五日まで

しかし、会期と会場はまもなく変更され、会期は一九二九年（民国十八）

中華民国教育部第一次全国美術展覽会出品日本洋画について

一月一日から三十一日まで、会場を南京に移し、徴集組事務所を杭州西湖大学院藝術教育委員会内におくこと、中国内外の藝術家が応募して作品（建築図型、絵画、彫刻および各種実用藝術など）を送るよう期待することなどを記した「大学院美術展覽会啓事」（広告）が出された（『申報』八月二日第四面）。全国美術展覽会開催はもとも劉海粟の発案によるもので、上海の画家をはじめ多くの画家の賛同を得ていたと思われるが、上海の画家の一部には、政府大学院主催の全国美術展覽会に非協力的な人もいたようである。『申報』一九二八年八月十四日の「藝術界」欄（増刊第五面）は、大学院は先に上海の藝術家張聿光、丁衍庸、陳抱一、朱應鵬、俞寄凡、梁得所、周勤豪、陳宏の諸氏を全国美術展覽会委員に招聘したが、いずれも就任しないことを表明した、ただし大学院ではそれら諸氏全員に、八月七日付で展覽会への出品を要請する書簡を送った、聞くところによると、張、陳、丁、朱の諸氏は近ごろすでに上海藝術協会に加入していて、協会の第一次展覽会が九月開催と決定しているため、大学院の美術展覽会に出品する暇がないということらしい、と伝えた。この背景には、上海美術専門学校を中心とする画家たちと、林風眠など欧州留学組の感情的対立があったと考えられるが、今はそこまでは立ち入らない。

中華民国政府大学院が日本政府に出品を依頼したのは、一九二八年九月中旬以後のことと考えられる。中国政府からの要請を受けて、外務省は十月二日付で在南京領事岡本一策と在杭州領事代理米内山庸夫に大学院美術展覽会の調査を命じた。訓令を受けて米内山は大学院藝術委員会に赴き、大学院美術展覽会の組織、内容、進捗状況などを調べ、同美術展覽会に対する国民政府の意気込みと、その開催がもたらす影響について意見を付して、十月十二日付で外務省文化事業部長岡部長景に次のような報告書を送った。<sup>(12)</sup>すこし長

文であるが、展覧会準備中の状況を伝える唯一の資料でもあるので、全文を挙げておきたい。なお、以下読点は筆者による。

#### 大学院美術展覧会ニ関シ回報ノ件

民国十八年一月一日ヨリ南京ニ於テ開催セラルル大学院美術展覧会ニ関シ、十月二日附文化一普通令第九六四号貴信ヲ以テ御申越ノ趣了承、直ニ当地国立藝術院内該展覧会籌備処ニツキ取調ヘタル処、本展覧会ハ国民政府成立後初メテノ国立展覧会ニ有之(大学院ハ全国ノ教育行政ヲ管轄シ旧教育部ニ相当ス)、支那側ニ於テハ相当力瘡ヲ入レ居ルモノノ如ク、杭州藝術院長林風眠其ノ他ハ本展覧会ニ出品スヘキ相当ノ大作製作ニ既ニ着手シツツアリ

該展覧会ハ明十八年一月一日ヨリ全三十一日マテ一ヶ月ノ期間ヲ以テ南京ニ開催シ、会場ハ中央大学(旧東南大学)及金陵大学内ニ設クヘク、展覧品目ハ絵画、彫塑、建築図案、工藝美術等ノ各種トシ、支那全国ヨリ募集スヘキハ勿論、日本其ノ他各国ニ対シテモ各所在支那公使館ヲ通シテ出品方勧誘シツツアリ

又支那側出品人ハ新旧各派ニ拘ラス広ク募集シ、各美術学校教員及学生其ノ他一般人ヲ網羅シ、現ニ出品申込四百余点アリ、開会迄ニハ多分五千点内外ニ達スヘキ見込ミトノコトナリ

該展覧会会長トシテ蔡子民<sup>(13)</sup>ヲ推戴シツツアルモ、今人ハ未タ就任セス、之ニ代ルモノ尚ホ未定トノコトナリ、其ノ他重ナル役員左ノ如シ

#### 美術展覧会職員

(以下、会長蔡子民以下、秘書、籌備委员会主任、出版宣伝組、徵集組、指導組、審査委員会委員など計七十四名の役職、氏名、所属の名簿を付すが、本

稿では省略)

右ニ依レハ、該展覧会職員ハ現代支那ノ有名ナル美術家及美術関係者殆ト全部ヲ網羅シツツアリ、新国民政府平和的施設ノ第一歩トシ、相当盛大ニ挙行スル意気込ナルモノノ如ク、現ニ前述ノ如ク林風眠(国立藝術院長ニシテ仏国留学出身)其ノ他当地国立藝術院職員等モ全藝術院製作所トシテ、約縦一間半横四間位ノモノ、其ノ他ノ洋画大物ノ製作ニ従事シツツアリ、本展覧会開会ノ暁ハ、今回ノ催シハ支那各方面ニ於テ相当「センセーション」ヲ起スモノト認メラルルニ依リ、且ツ現在国民的自尊心ノ新ニ勃興シツツアル支那ノ現状ニ対シテモ、今回ノ我方製作品出品ニ際シテハコノ点十分御考慮ノ上、御処理可然カト被存、御参考マテニ申添フ

該美術展覧会規則書及出品用紙各二部添付

(本稿末に付載の「中華民国大学院美術展覧会規章」、および裏面に「中華民国大学院第一屆美術展覧会出品条例」を印刷した出品用紙一部、「中華民国大学院第一屆美術展覧会徵集条例」を印刷した作家履歴用紙一部が添付されている。)

一方、在南京領事岡本一策は十月十九日付で文化事業部長岡部長景に、館員を大学院に派遣して、照会の各事項について問い合わせたところ、院長蔡元培、副院長楊杏佛はすでに辞職しており、また秘書処長兼展覧会籌備委員会主任許壽裳も最近辞職して郷里に帰っているため、大学院総務処長孫揆均から展覧会に関する諸規定を提示され、説明を受けた。孫揆均は、在杭州米内山領事代理が本月十二日付普通第二三五号で文化事業部長に報告したような話をしたあと、現在国民政府は改組の際で大学院は行政院教育部と改称さ



れる筈であるが（十月二十三日付で改組）、新大学院院長蔣夢麟はまだ南京に到着していない。そのため、今後本計画の内容に多少の変更があるかも知れない。とくに展覽会場は南京では適当な場所を得ることが困難であるから、結局杭州に決定されるかも知れない。但し、杭州での展覽会準備事務は林風眠、林文錚などが着々と進めているので、来年一月一日から開催することは確実である。ただ大学院長の更迭によって、一時停頓している状態である。新教育部長の任命を待つて、確かめてから追つて連絡する、と報告した。<sup>(14)</sup>

在杭州領事代理米内山庸夫が文化事業部長岡部長景に、十月十二日付報告書を送つてから十日後の十月二十一日、展覽会秘書兼宣伝組委員兼審査委員（<sup>15</sup>）会委員林文錚と審査委員会委員王月芝の二人が米内山を訪問、日本からの出品を要請し、もしも期日切迫のため新たな制作が困難な場合は、旧作でも日本の展覽会に出品した作品でも差し支えない旨付言した。米内山は十月二十二日付で岡部長景に二人の来訪を報告し、合わせて日本からの出品について配慮を請う次のような報告を送った。<sup>(16)</sup>

……該展覽会ハ、主トシテ当地国立藝術院同人ヲ中心トシテ熱心ニ計画セラレツツアリ、現二元ト浙江大学院長ニシテ、本件ニ相当理解ヲ有スル蔣夢麟カ今回国民政府教育部長タルヘク、已ニ南京ニ赴キシ關係モアリ、該展覽会ハ予定ノ如ク開会セラルヘク、且ツ永ク戦乱ニ悩マサレシ一般国民ニ何等カノ転還ヲ与フヘキ新政府ノ文化的事業トシテ、各方面ヨリ相当歡迎セラルヘシト被想、從テ該展覽会ニ対スル本邦人ノ出品ハ、一面本邦現代文化ヲ支那人ニ紹介スル意味ニ於テ、他面日支間ノ文化的聯絡ヲ計ル上ニ於テ、相当有意義カトモ被存ニ就テハ、右本邦人出品方ニ関シ何分ノ御配慮ヲ相煩度、若シ現ニ開会中ノ帝展出品ノ一部ニテモ、

特ニ出品方御考慮ヲ得ハ最モ幸ト被存、先方ニ回答ノ都合モ有之ニ付、何分ノ儀御回訓ヲ得度シ

外務省は米内山から日本の出品を要請する報告を受けて、对中国文化事業の一環として出品することを決定したようである。十一月一日、文化事業部書記官岩村成允は対支文化事業部長岡部長景の意を受けて東京美術学校長正本直彦を訪問し、日本からの出品について協力を依頼した。<sup>(17)</sup>

十一月六日、米内山領事代理は田中外務大臣に宛て、大学院美術展覽会に關し中国側準備委員と種々協議したところ、中国側は、

①会場を南京の金陵大学および中央大学の二箇所以内定し、もしも手狭なときは図書館を使用すること

②日本側出品はできるだけ多数を歓迎し、場所はどのようにでも提供すること

③作品の大きさに制限はないこと（中国側では洋画一号、二号その他特別大きいものも制作しているようである。）

④日本側の出品は無審査とし、十二月二十日までに南京に到着するようにしてほしいこと

⑤通関手続きは中国側で便宜を計らい、上海、南京間の輸送は中国側委員の手を経ること

⑥運送費および途中の危険は中国側が負担すること、などを申し出ている旨報告したあと、続けて、

……本件ニ関シ支那側ハ特ニ日本ノ好意ヲ感謝シ、日本現代ノ美術力支那美術ノ今後ノ發展ニ資スルモノ鮮カラサルモノトシテ、今回ノ日本側

ノ出品ニ多大ノ期待ヲ懸ケ居ルモノ如シ、支那側ニ於テハ日本側ノ出品ニ何等制限ヲ附セス、出来得ル限り多数ヲ歡迎スト称シ居ルモ、会場ノ都合並支那側出品数（審査後結局一千点位トナルヘシトノ予想）トノ振合等モ考慮ニ入レ、結局二百点乃至三百点位ヲ適當トセスヤト考ヘラル、又運送費ハ全部支那側ニテ負担スヘシトノ事ナルモ、御承知ノ通支那政府ニ於テハ現在財政左程豊カナラサル次第ナルニ付、本件事業ノ性質ニ顧ミ、右運送費（東京ヨリ上海迄ノ運賃諸掛リ）ハ我方ヨリ進ンテ適當ノ名目ヲ以テ補助方、可然御考慮相成ル間敷クヤ（但本件、本官ヨリ何等支那側ニ「コミット」シ居ラス、御参考迄ニ）、右何分ノ儀御回訓相成度シ

と運送費については、中国政府は現在財政豊かでないから、本事業の性質に鑑み、日本側から進んで適当な名目で補助することを考慮してほしい、と要請した。<sup>(18)</sup>

十一月八日、外務省は文化事業部長岡部長景の名で、京都清水六兵衛方滞在中の東京美術学校長正木直彦に宛て、米内山庸夫からの報告の要旨を送った。<sup>(19)</sup> また同日、岩村書記官は岡部部長、三枝課長に宛て、杭州からの来電の件につき正木校長と相談の結果、川合（玉堂）、小室（翠雲）、荒木（十畝）、結城（素明）、和田（英作カ）の五氏に通知し至急話を進めるように依頼したこと、出品は大体日本画百点、洋画五十点、彫刻その他五十点、合計二百点ぐらいを目処にしたいと北浦（大介）と話し、作品を上海または南京埠頭まで輸送する費用の調査を依頼したことを報告するとともに、米内山領事代理の報告の写しを上記五氏に送付した。<sup>(20)</sup>

この時点で、外務省文化事業部および正木直彦など日本側関係者は教育部

美展への出品は、日華絵画聯合展覽会と同じく東方絵画協会が事務を担当し、日本画を中心にして日華絵画聯合展覽会と合同、拡充する方向で考えていたようである。十一月十四日付『時事新聞』の次の記事もそのことを窺わせる。

今度は南京で 日支の美術展 来年一月の開催に日本から二百点出品  
唐宋元明の古名画展は既報の如く今月二十四日から上野美術館で催されるが、今度南京政府主催で日支文化融合の爲め、更に欣ぶべき企画が行はれてゐる……教育部主催で日支両国の美術展が来年の一月一日から三十一日まで南京で行はれるといふのである、南京中央大学と米人経営の金陵大学とを会場とし、杭州の美術専門学校校長林風眠氏がこの最初の「文展」とも云ふべき展覧の創立事務所長となり、支那の美術家を勧誘すると共に、我が外務省にも出品を要請してきたので、正木美術学校長を始め、荒木十畝、小室翠雲、結城素明、和田英作の諸氏が会合して帝展、院展、美術協会等から期間に間に合ぬ為め旧作を出品する手筈になつてゐる、種類は日本画、洋画、彫刻、工藝を含み二百点以内の予定で、出品事務所は東方絵画協会とし支那に出品する迄の運送其他の費用は日本で負担することになるらしい。

外交史料館蔵『展覽会関係雑件』第七卷に、紙名および月日を欠くが、その位置から右の『時事新聞』記事とほぼ同じところと推定される、「各国の現代名作を集め 南京で世界美術展……日本からは百点出品」という見出しの記事切抜きが綴じられている。記事には「……同展覽会は……近年衰へてゐる同国画壇を刺激復興せしめ、一方民衆の教化につとめるため、広く各国の現代名作約五千点を集め、南京の大学を開放して会場を当てるといふ意気込

み凄まじい大計画である。日本側の出品は主として東方絵画協会から帝展始め各団体に交渉して日本画、洋画百点をまとめる事になった……」とあり、ここからも外務省などは東方絵画協会を窓口にする考えであったことが窺われる。この記事はまた、中国側に欧米各国からも出品を期待するという大きな構想があったらしいことを窺わせるが、その交渉を伝える資料は見当たらない。

当時、外務省文化事業部と正木直彦などは第五回中日絵画聯合展覽会の準備を進めているところであった。中国政府からの出品要請は、十一月二十六日、王一亭、方若、金開藩、閻鐸、正木直彦、坂西利八郎、小室翠雲、荒木十畝、渡辺晨畝、岡部長景などが出席して、東京会館で開かれた「日支聯合絵画展覽会ニ関スル協議会」で最初に検討された。しかし、「南京政府ノ教育部美術展覽会開催ニ付、我領事館ヲ経テ外務省ニ出品ヲ依頼シ来レルカ、此会ニ合同スヘキヤ否ヤニ付支那側代表ニ諮リタルニ、之ハ西洋画ヲ主トスル人々ノ計画ナレハ、之ト共同スルコトハ賛成出来難シ、ト言フヲ以テ合同セサルコトニ相談一決」<sup>(21)</sup>し、外務省は日華絵画聯合展覽会とは別に対応せざるを得なくなった。

一方中国では、教育部が当初展覽会場に予定していた金陵大学などが会場提供に難色を示し、会期の決定が遅れた。その間、日本側は進捗状況について度々中国側に問い合わせていたことが、外交記録に残されている。十一月二十五日付で在南京領事岡本一策は、田中外務大臣に次のような報告を送った。<sup>(22)</sup>

其ノ後屢々教育部ニ聞合セタルモ、金陵大学ハ会場ニ当ソルコトヲ肯セス、依テ中央大学其ノ他心当リ物色中ニテ未タ決定スルニ至ラストノコ

トナリシカ、会期既ニ切迫シタルニ付、本二十四日更ニ館員ヲ教育部ニ派シ確メタル処、中央大学ニ於テモ会期一週間位ナラハ兎モ角、一ヶ月ト言フ期間ハ差支アリトテ断ハラレ、最近本件籌備主任林文錚杭州ヨリ来寧、会場ヲ物色セルモ終ニ適當ナルモノナク、同人ハ昨日上海ニ赴キタルカ、結局上海ニ於テ開会スルコトナルヤモ知レストノコトナリ

十一月三十日、在杭州の米内山領事代理は田中外務大臣に宛て、展覽会は会場問題で困っていたが、今回南京に見切りをつけ、上海の国貨展覽会場とするようであるが、現在国貨展覽会が開催中であるから、美術展覽会はその閉会后、たぶん三月一日からとなる、正式決定次第電報で知らせるが、会場を上海国貨展覽会場とし、期日は三月以後になることは大体決定とみて差し支えない、と連絡した。<sup>(23)</sup>

十二月六日、『申報』(第十面)は「教育部美術展覽会、上海で開催」の見出しで、教育部美術展覽会はもともと首都(南京)で開催の予定で、会場をあまねく探したが適当な場所がなかった、というのはこの美術展覽会は、広大な面積と十分な光線を必要とし、且つ展覽の便宜のためには会場を分けることができないからである。首都の大学には比較的適した建物があるが、会場を分けなければ陳列できない。そこで籌備委員会はこの事情を考慮して、教育部長の同意を得て会場を上海に移すこととした。展覽会秘書林文錚は連日各方面と交渉を続け、先月下旬上海に来て国貨展覽会場を見、会場が広大なこと、光線の具合が良いことから、直ちに美術展覽会会場として借りることにした。聞くところによると、国貨展覽会は会期延長になるかも知れないということ、教育部美展もまた影響を受けざるを得ないであろう、と伝え

十二月八日正午、教育部長蔣夢麟、中央研究院院長蔡元培、副院長楊杏佛は上海の知名士を銀行公会俱樂部に招いた。出席者は呉稚暉、于右任、孔庸之、虞洽卿、穆藕初、錢新之、袁履登、林康侯などであった。まず蔣教育部長が、大学院が計画した美術展覽会は教育部がそのまま引き継いで、上海新普育堂国貨展覽會場で開催すると説明し、上海の人々の協力を懇請した。ついで蔡元培が、人生は本来美術を重視するものである、……国貨展覽會の成立は本来国貨の創造に役立てることであり、国貨は精美を追求すれば勝を制する。すなわち美術展覽會が続いて開催されることは、まさに大きな関係があると述べ、続いて孔庸之が、人は衣服・飲食・住居・行路（交通）のほかにも、「安居樂業」（その居に安んじ仕事を樂しむこと）を求めるべきである、よく安樂ならしむるものは、ただ美術だけである、どうか私の提唱に賛同し、皆さんの收藏品を展覽會に出品してほしいと話し、呉稚暉は、わが国数千年の歴史で国家主催の公開展覽會がまさにこれから始まろうとしている、どうか国貨展覽會の精神を繼承してほしいと述べた。<sup>(24)</sup>

展覽會籌備處は、十二月二十二日（『申報』第五面）および二十八日（同紙第三面）の「教育部美術展覽會啓事」で、大学院美術展覽會は大学院が教育部に改組されたため教育部美術展覽會と改称し、会場を上海西門新普育堂国貨展覽會場に移して二月十五日から一ヶ月開會することになった、と公告した。

明けて一九二九年一月三日、在杭州の米内山領事代理は田中義一外務大臣に宛て至急報で、「本三日美術展覽會ヨリ、二月十五日上海西門新普育堂（現国貨展覽會場）ニ於テ開會スル事ニ決定、一月五日ヨリ同處ニ於テ事務ヲ開始スヘク、出品ハ一月二十日以前ニ同事務所ニ送付煩度旨申越アリタリ」と知らせた。<sup>(25)</sup> ついで一月十日、米内山総領事代理は田中外務大臣に、訓令

（各項冒頭の括弧内）に基づいて本日林（文錚）秘書長に確かめたところ、

- 一、（本展覽會ハ名実共ニ教育部ノ主催ニ係リ、政府側ニテ相当力ヲ入レ居ルモノナリヤ）本展覽會ハ教育部主催ニシテ、蔣教育部長カ会長ヲ兼任シ、相当力ヲ入レ居ルモノナリ、尤モ本會ハ元來当地国立藝術院長林風眠ノ計画ニ係リ、從テ総弁董事ハ主トシテ当地藝術院ニ於テ弁理シツツアリシモ、其ノ後全部教育部ニ移管シタルモノナリ
  - 二、（日本側出品ヲ一月二十日以前ニ上海ニ到着セシムルコト不可能ナルニ付、二月十日頃迄ニ到着セシムルコトシテ差支ナキヤ）差支ナシ
  - 三、（会場ハ展覽會場トシテ適當ナルヤ、其日本側ニ提供サルヘキ陳列室ノ壁の面積何程ナルヤ）会場ハ元來展覽會場トシテ建設セラレタルモノナラサルヲ以テ理想的ニハ非サルモ、現ニ国貨展覽會場トシテ、相当有効ニ使用セラレアリ、光線ノ工合モ左程悪クナシ、日本側ニハ壁面約五百呎（横幅）ヲ提供スヘシ、彫刻及工藝品ハ此ノ以外トス（尚壁面ハ日本側出品ノ模様ニ依リテハ、之以上多少ノ融通ハ附クヘキモノノ如シ）
  - 四、（支那第一流ノ美術家多数出品スルヤ、又外国人大家モ出品スル見込ナリヤ）支那第一流ノ大家ハ大抵出品ス、欧米ヨリノ出品ハ期日ノ關係上困難ニテ今ノ處決定シタルモノナシ
- 陳列ハ大体北平、上海、広東及杭州ヲ中心トシタル各団体、並日本側出品ニ区分シテ地方別ニ陳列スル予定ナリト

いうことであつたと報告した。<sup>(26)</sup>

中国では、このころから展覽會の準備が軌道に乗りだしたようである。

『申報』は一月十日（第十一面）に「全国美術展覧会之組織」、十一日（第十一面）には「教育部全国美術展覧会組織大綱」、十七日（第十二面）には「全国美術展覧会総務会成立」と相次いで進捗状況を報道し、二十二日（第十一面）の「全国美術展覧会総務委員会」で作業日程、会期が決定したことを伝え、「出品細則」を掲載した。ついで教育部美展会は一月二十七日、「教育部全国美術展覧会通告第一号」を出し（『申報』第六面）、会場を上海新普育堂（国貨展覽会場址）とすること、開会日を三月二十五日に改めること、および詳細な出品分類、出品資格、出品件数などを規定した「教育部全国美術展覧会徵集出品細則」<sup>(27)</sup>を発表した。

日本側は米内山総領事代理からの報告を受けて、昭和四年（一九二九）一月十三日午後七時から華族会館で岡田三郎助、和田英作、藤島武二、満谷国四郎、中村不折（以上帝展）、石井柏亭（二科会）、東京美術学校校長正木直彦、同学校文庫主任北浦大介、外務省岡部（長景）部長、三枝課長、岩村書記官が出席して「支那教育部美術展覧会出品ニ関スル協議会」を開催し、次の事項を決議した。<sup>(28)</sup>

一、支那教育部美術展覧会出品協会ヲ組織シ、事務所ヲ東京美術学校文庫又ハ東京府美術館内ニ置クコト

一、正木、岡田、和田、藤島、満谷、中村、石井諸氏ヲ委員トシ、正木氏ヲ委員長トシ出品事務ヲ総轄スルコト

左記諸氏ニ通知シ委員ニ加入セシムルコト

（春陽会） 小杉未醒

（帝展） 和田三造

（国画会） 梅原龍三郎

中華民国教育部第一次全国美術展覧会出品日本洋画について

（二科会） 山下新太郎

（春陽会） 山本 鼎

一、出品物ハ総テ西洋画トシ、大小ハ強テ制限セサルモ、運搬ノ都合上成ルヘク小形中形ノモノトシ、其ノ点数ヲ約百点内外ト定メ、前記委員ノ名ヲ以テ各美術団体ノ「無鑑査」格以上ノ者ニ出品ヲ勧誘スルコト

一、出品ハ一月二十五日迄ニ美術館ニ取集メ、関係者一覽ノ上荷造ヲナシ、一月中ニ発送スルコト

一、運送及荷造保険料諸雜費等ニ関スル經費ハ、文化事業費ヨリ出品協会ニ補助スルコト

一、右展覽会開会中渡支スル美術家ニハ、数名ヲ限り文化事業費ヨリ視察手当ヲ支給スルコト

この決議を受けて、外務省文化事業部は翌一月十四日、田中外務大臣の名で杭州の米内山領事代理に、各美術団体と協議したところ、展覽会開会期日が切迫しているため日本画の出品は困難であるが、中国側の折角の希望であるから、今回は西洋画を出品することにし、正木美術学校長および岡田三郎助、和田英作、藤島武二、満谷国四郎、中村不折、石井柏亭、その他の諸大家が尽力して、自己作品の外、優秀な作品大小百点内外を東京、京都、各地から至急取りまとめ、一月末または二月初に神戸から発送するはずで、すでに準備に着手した、出品作品の取集め、荷造りおよび日本・上海間の輸送費、保険料等の諸経費は日本側で負担する、と通知した。外交史料館蔵『展覽会関係雑件』第七巻に、帝国美術院会員および元会員、推薦など四十六名、二二科会会員、会友三十一名、春陽会会員十七名、国画会六名、合計百名の氏名

と一部の画家については号数を記した野紙七枚が綴じられている。その位置から一月十三日の前記協議会に提出された出品依頼予定画家の名簿と考えられ、それに基づいて外務省と正木直彦は洋画家百名、作品約百点の出品を期待したようである。

支那教育部美術展覧会出品協会（以下、出品協会と略称）は一月十三日の協議会の後、すぐに発足し、一月十五日付で出品協会委員長正木直彦、委員中村不折、藤島武二、岡田三郎助、満谷国四郎、和田英作、山下新太郎、小杉未醒、石井柏亭、梅原龍三郎、山本鼎の連名で、出品予定の画家に出品を要請する書簡（油印）および「出品目録」（出品申込み書）を添付して、次のような書類を送付した。<sup>(29)</sup> 括弧内のひらがな混じり文は筆者による要旨である。

#### ○会期及会場

一、主催者ハ支那政府教育部（初メハ民国大学院美術展覧会ト称シタルモ、近頃教育部ヘ移管シタルモノナリ）

一、会期 二月十五日ヨリ一ヶ月

一、会場 上海西門新普育堂内（国貨展覧会跡）

#### ○当協会取扱出品要項

一、洋画ニ限ル

二、出品者ハ帝国美術院会員・委員等無鑑査出品者、二科会、春陽会、国画会ノ会員・無鑑査出品者等、本会ヨリ依頼シタルモノニ限り、一般ノ出品申込ニハ応ゼズ

三、出品ハ一人一点トシ、大サハ制限ナキモ輸送ノ都合上、八十号以下ノモノヲ望ム

四、出品目録ハ折返シ御送付ヲ乞フ

五、出品ハ賣品ニテモ非賣品ニテモ可（但賣約シタルトキハ賣価ノ一割ヲ展覧会ニ収ムル規定アリ）

六、（作品は一月二十五日まで上野に到達するように送付してほしい。）

七、本月二十六七日頃、出品ヲ一度陳列シテ出品者及関係者ニ御目ニカケタル上、直チニ荷造シ、月末ニ発送ス

八、運送中ノ危険ニツイテハ当方ニテ保険ヲ附シ、上海ニ於ケル保険ハ支那側ニテ負担スルヤウ交渉中ニ付、非賣品ニハ保険価格ヲ附セラレタシ

九、荷造、運送及途中ノ保険料ハ一切外務省文化事業部ノ給付ヲ受ケ、出品者ニ費用負担ヲ乞フ等ノ事ナシ

十、出品者ノ略歴ヲ申送ル考ニテ、之レハ大体東京朝日新聞社ノ美術年鑑ニヨル等ニ付、同年鑑ノ記載ニ補足シ又ハ訂正スベキ点アラバ御申越ヲ乞フ

十一、出品ノ全部又ハ一部ヲ図録ニ作ル事モ考慮中ニ付、予メ御承知ヲ乞フ

一月二十二日、外務省文化事業部は教育部美展に日本から出品することを報道機関に発表した。それを受けて二十四日付の各新聞は揃って詳細な記事を載せた。たとえば『時事新聞』は「三月には開く 日支美術展 日本からは洋画百点 二月なかばに上海へ」、『報知新聞』は「支那政府主催の一回美術展 日本からも洋画出品」、『東京朝日新聞』は「美術品で日支提携 国民政府の大展覧会に」などの見出しを掲げ、そのほか『国民新聞』、『大和新聞』なども同じように報道した。<sup>(30)</sup> それらの報道は上海にもすぐに伝わったらし



く、一月二十八日の『申報』（第十一面）は、国内出品の総作品数は数百丈の面積を下らない、そのほか日本、フランスも多数の作品を出品するといっているが、まだ到着していないと伝えた。

二月二十二日、『申報』（第十二面）は「全国美展会日本出品油画」の見出しで、教育部美展籌備処は日本の駐上海総領事から書簡を受け取った、それによると外務省は美術団体と協議したが、日本からの出品は期日が迫っているので日本画の出品は困難であり、洋画を募集することにし、すでに正木直彦校長、岡田三郎助、和田英作、藤島武二、満谷国四郎、中村不折、石井柏亭その他の諸大家が協力して大小百点あまりを集め、一月末か二月初に神戸から発送する、輸送、保険料などの経費はすべて日本側が負担することになっている、と報道した。

しかし、正木などの努力にもかかわらず、二月二十日を過ぎても応募作品は百点に達しなかった。出品協会が二月二十三日現在で作成した「支那教育部美術展覧会出品目録」<sup>(31)</sup>には六十八点が掲載されている。

三月一日、出品協会は上野の東京府美術館で出品予定の六十八点の洋画を陳列し、関係者および新聞記者に披露した。正木直彦は同日午前その下見会に行き、正午から外務省文化事業部が上野精養軒に出品協会委員を招いた午餐会に出席した。<sup>(32)</sup>出席者は岡田三郎助、和田英作、満谷国四郎、中村不折、石井柏亭、和田三造、正木直彦、山下新太郎、北浦大介、岡部（長景）子爵、外務省から坪上文化事業部長、三枝課長、岩村書記官、松井の十四名、欠席は藤島武二、小杉未醒、山本鼎、梅原龍三郎の四名であった。まず、岡部、坪上新旧文化事業部長から離任、就任について挨拶があり、午餐後、打合せに移り、百点出品の予定に対し、現在集まっているのは「六十九点」<sup>マヤ</sup>に過ぎないから、この際各委員から一、二点づつ追加出品してはどうかという提案

が北浦大介から出され、正木が賛成して各委員に懇請した結果、満谷は小品二点、石井、山下は各一点、中村は大作二点の追加出品を承諾した。また「日支美術家聯歡ノタメ渡支スル者」に対して旅費を補給する案が出され、委員の希望を問うたところ梅原、満谷が三月渡航を、和田三造、和田英作、岡田三郎助は四月渡航を希望した。ついで和田英作から補助金の額について質問があり、一名あたり大体六百円（東京・上海間旅費二百五十円、滞在二週間分の見積もり三百五十円）と説明された。また和田三造から、本協会の趣旨書で責任者がはつきりしないため、出品を見合わせた者があると発言があり、正木その他が説明した。<sup>(33)</sup>

日本側関係者が出品点数を、「当初予定の百点にしたい」と百点という数にこだわったのは、文化事業部が各報道機関に発表した内容にその数字が入っていて、各紙が一月二十四日付で一斉に「約百点」と報道し、さらに上海でも、先に記したように駐上海総領事が教育部美術展覧会籌備処に送った書簡の内容が『申報』に報道され、やはり「大小一百件左右」と伝えられたためであろう。

出品協会は三月一日付で委員長正木直彦の名で、外務大臣男爵田中義一宛に「出品協会規則」を添付して、支那教育部は三月二十日から上海で美術展覧会を開催するにあたって日本側の出品を希望する旨申し入れてきた、「右展覧会ノ性質ニ鑑ミ、此際先方ノ希望ヲ容レ本邦美術品ヲ出品スルコトハ、日支美術ノ向上、文化ノ聯絡ニ裨益スル処尠ナカラサルノミナラス、延テ国交上ニモ好影響ヲ与フルモノト認メ」、わが美術団体代表者が協議の上、一般の賛同を得て支那展覧会出品協会を組織し、一切の事務を取扱うことになった、ついでには本事業助成のため五千元を下付してほしいと申請した。それに対し田中外務大臣は三月十一日付指令書で、「昭和三年度ニ於テ金五千元



ヲ交付スヘシ」と指示を下した。<sup>(34)</sup>

正本をはじめ出品協会委員の努力で、数日の間に作品は八十二点になった。

三月四日、田中外務大臣は在上海総領事重光葵に「本邦著名画家ノ油絵大サ百号型以下八十二点ヲ木箱八個詰トシ、五日横浜出帆ノ日本郵船筑波丸ニ積込ミ、貴館付トシテ発送」したことを通知した。<sup>(35)</sup> 出品協会はそれら出品作品を『中華民国教育部美術展覧会 日本出品画冊』（挿図1-5）に編纂し、三月十三日付で発行した。三月十四日、田中義一外務大臣は上海の重光葵総領事に、教育部美術展覧会日本出品事務監督および長江方面における文化関係事項の視察のため岩村書記官を出張させること、岩村は洋画家梅原龍三郎とともに三月十八日神戸出港の長崎丸で上海に向かう予定であると知らせた。<sup>(36)</sup> つづいて三月二十五日、田中外務大臣は重光総領事に、岩村の手荷物十六個を長崎丸で発送したことを知らせ、総領事館宛と記した九個のなかに入れた「洋画図録千七百部ヲ取出シ、之ヲ展覧会場ニテ一部一弗ニテ販賣セシムル様可然御手配ヲ請フ」た。<sup>(37)</sup>

展覧会は三月二十日開会の予定が三月二十五日に延期され、さらに四月十日になった。日本出品の作品は発送されたが、岩村書記官の出張と梅原龍三郎の渡航は延期された。三月二十八日付で在上海総領事館藤井啓二書記生は本省の岩村書記官に、このたび当地で開催される美術展に本邦から出品の件について、過日、乙津（鋒次）、田中両副領事に申し越された文書は小生も拝見し委細承知しました、小生はこのような展覧会の経験は全くありませんので、貴官のご指示を仰ぐべくご来滬を期待していましたが、出張延期との貴簡に接し失望しました、「斯克相成リタル上ハ万事両副領事及飯島（正男）氏等と協議ノ上処理」するが、お気づきの点は随時注意してほしい、お尋ねの諸点は次の通りである、と以下のような回答を送った。<sup>(38)</sup> 括弧内のひらがな

混じり文は筆者による要約である。

一、（開会期日が再三延期されたことは既電の通りで、目下のところ四月十日開会の予定である。展覧会籌備主任教育部秘書陳珍年は一ヶ月来病氣休暇で、委員江新及び王濟遠が本邦側出品に対応している。）

一、（出品画の通関に関しては折衝の結果、価格を記さず目録も提出しないで終わつたが、返送の際には、賣却品に対して輸入税を徴収するというかも知れない。）

一、会場ハ城外国貨路（当館ヨリ自動車ニテ三十分ヲ要シ、交通便ナラス）ノ旧国貨展覧会場ノ東半部ヲ当テラレ居レリ、右ハ展覧会場トシテ建テラレタルモノニ非サルモ（天主堂経営ノ病院タリシモノナリ）、支那ニテハ余リ贅沢モ云ヘス、日本側出品ハ其三階ニ陳列セラルル筈、過日飯島氏ヲシテ陳列室ヲ下見セシメ、雨漏箇所ノ有無等ヲ点検セシメ置タリ

一、本展覧会開設ノ経緯ハ当時杭州領事往信所報ノ通りニシテ、日本側エ出品方申出タルハ現展覧会ノ前身ナル藝術学院ナリ、陳秘書等ヨリハ当時ノ排日風潮ニ鑑ミ、当館ニ対シ別ニ出品ヲ勸メ来リタルコトナク、当館ハ出品決定後会場ノ当地ニ変更サレタルニ依リ、其事務ヲ引受ケタル次第ナルコト御承知ノ通りナリ

一、右展覧会ハ同政府最初ノ企ニテモアリ、斯種施設ニ不案内ナルモノノ如ク、飯島氏ニ対シ院展等ノ設備振ヲ尋ネ居ル由ナリ、又支那人ノ出品ハ油絵ノミニテモ二、三千点以上ニモ達シ、全ク「ツマラヌ」モノ多カリシモ審査ノ結果、三百点位入選セシメタル趣ニテ、余リ期待出来サルニ非スヤト存ス

挿図 2 中村不折「賺蘭亭」同画冊から

挿図 1 『中華民國教育部美術展覽會 日本出品画冊』  
表紙 個人蔵

挿図 3 中村不折「司馬相如ト卓文君」同画冊から

挿図 4 石川寅治「浴後」同画冊から

挿図 5 小杉未醒「婦牧」同画冊から

一、(唐宋元明画冊は連絡があるまで保管する。)今次展覽会画帳ハ主トシテ飯島氏ニ取扱ハシメ、別ニ百部位ヲ三邦人書店ニ賣捌シ得ヘシ、此手数料ハ一割トシ、新聞広告料ヲ捻出スヘシト飯島氏ハ述ヘ居レリ、(この画帳も賣品のため、通関に際して関税の問題が生じた。また右の内から百部くらいを唐宋元明画展出品者、名士、文化事業委員などへ寄贈したい。)

一、日本側出品目録ハ二種ニ分チ印刷スルコトセリ、一ハ体裁良キ小冊様ノモノトシ、他ハ一枚刷ノモノ(約五百部)トシ会場ニ備ヘ置クコトトスヘシ、不日印刷出来上リノ上ハ貴覽ニ供スルコト致スヘシ

一、(展覽会閉会後に返送するときの荷造りは、飯島氏に責任をもってさせる。)

一、日支聯合展覽会ニ関シテハ、既ニ兩次電報ヲ以テ回報セシ通りナリ

一、(諸費用は飯島が請求書を取りまとめておき、出品代表の来滬をまつて支払うことにした。)

一、(展覽会開幕日については電報するから、その上で出品代表の渡支を決めてほしい。)時局ニ付テハ新聞等ニテ御了悉ノコトト存スルモ、展覽会側ニテハ右経費トシテ二万弗也ハ既ニ受領シ居ルヤニ伝ヘラル

先にも触れたが展覽会開幕日は三月二十日から三月二十五日に延期され、さらに前日二十四日になって、出品が甚だ多く準備が間に合わないため「准期四月十日開幕通告」が各紙に出され(『申報』第五面)、二十八日にも再び「教育部美術展覽会准期四月十日開幕通告」(『申報』第五面)が出された。し

かし、一部には重ねての延期が危惧されていたことが、『申報』記者の美展総幹事孟壽椿への訪問記事から窺われる(同紙四月五日第十面「本埠欄」)。記者がはじめに「十日開幕と決めたが、また延期することはないか」と問うたのに対し、孟壽椿は「決して延期しない」と準備の進捗状況を詳しく説明した。同じころ在上海領事館にも「十日開幕」と伝えられたらしく、四月六日、重光総領事は田中外務大臣に宛て、「美術展覽会ハ本月十日開会ニ決定シタル趣ニ付、我方出品ハ本日会場ニ搬入ノ筈ナリ」と連絡した。<sup>(39)</sup>

四月十日、開会式が行われ、日本側は田中正一副領事と出品者代表として梅原龍三郎が出席し、田中副領事が挨拶をした。四月十四日、重光総領事は田中義一外務大臣に開会式の来会者、式の状況などについて報告書を送り、会場の展示と出品点数についても報告した。<sup>(40)</sup> 同報告は、日本出品作品の陳列状況を伝えており、また展覽会の総出品点数が前稿で挙げた数字と少し違うので引いて置きたい。

#### 一、来会者(省略)

#### 一、開会式ノ状況(省略)

#### 一、会場及陳列振

会場内ノ「ホール」ニ於テハ、上海藝術学院等ノ生徒ニヨリ余興ヲ行ヒ、全「ホール」ノ二階大広間ニハ大幅ノ国画及洋画、石膏及雕刻ヲ陳列シ、会場ノ西部建物ノ二階及三階ノ数十室ニハ国画ヲ陳列シ、東部建物ノ二階各室ニハ洋画及美術工藝、建築及写真ヲ、又三階各室ニハ参考品陳列ニ充テラレ、日本側出品八十二点ハ東端四室ニ、其他ノ各室ニハ古画及近代名画等ヲ陳列シ居レルカ、出品多数ニシテ猶陳列シ切レサル趣ニテ時々掛替ヲ為シ居レリ

一、出品点数

支那側出品目録ニ別添ノ通ナルカ、各部出品点数左ノ如シ

書画	一八七五
油画	五八〇
金石	六〇
雕塑	五二
建築	四八
工藝美術	二六九
写真	一六三

一、入場料

普通入覧券	小洋二元
長期券	大洋二元
参考品部入覧券	四角
同長期券	大洋五元

開會翌日の十一日午前九時、梅原龍三郎は再び会場を訪れ、五時間あまりかけて丹念に会場を見て廻った。『申報』（四月十二日第十面）は、梅原は展覽会について長文を撰し、『美展三日刊』に発表したと伝えるが、『美展三日刊』に梅原の文章は見当たらない。五日目の四月十四日午前、日本側代表満谷国四郎、島村学三郎（東亜考古学会幹事）、岩村成允（外務省書記官）、理興三吉（東方文化事業上海委員会）、原田淑人（東京帝国大学教授）、重光葵は会場を訪れ、各陳列室を丁寧に見てまわり、午後三時過ぎ会場を出た。一行は夕刻六時半から孟壽椿、徐志摩、王濟遠、江新による招宴に出席した。<sup>(41)</sup>

教育部美展は四月三十日閉会、五月一日に閉会式が行われ、在上海総領事

重光葵が出席した。重光葵は五月四日、田中義一外務大臣に宛て次のように報告した。<sup>(42)</sup>

……同展覽会ハ予定ノ如ク本月一日閉会式ヲ挙行シタルカ、其席上総幹事孟教育部秘書ノ報告セル所ニ依レバ、会期二十日間ノ入場者ハ約十万人ニ達シタルカ詳細ハ会務報告ヲ以テ発表スヘキ旨（入手次第進達スヘシ）述ヘタルカ、五月四日新聞報ハ、右ニ関シ其社説ニ於テ大要、此種ノ企テハ久シク戦乱ニ苦シミタル人民ヲ蘇息セシムルニ効果大ナルモノアリタル処、（一）同会ハ会期短縮ニ過キタル嫌アリ、（二）会場ハ町端レニ片寄りシコト、（三）出品人ハ多ク東南人ニシテ全国的ナラサリシコト、（四）陳列品ハ豊富ニ過キシ為、観覧者ハ応接ニ暇ナク研究的態度ニ出テサルノ感アリタリト論評セリ

尚、同会場ハ前記ノ如ク遠隔ニシテ交通稍不便ナリシ為、邦人ニシテ參觀セサリシモノ少カラサルヲ以テ費用ハ何トカ工夫スルニ付、日本側出品協會出品ノ洋画ヲ可然キ「ホール」ニ於テ三日間位特別陳列セラレ度旨申出アリタルニ付、当地出張中ノ岩村書記官及満谷画伯等トモ話合ノ上、其希望ニ応スルコトトシ飯島ヲシテ陳列方等取扱ハシメ、右終了後遅クモ本月二十日頃迄ニハ本邦ヘ送還ノ筈……

出品協會出品洋画は五月十日から三日間、上海毎日新聞社の毎日ホールで「中華民国教育部美術展覽会日本側出品洋画展覧会」として展覧された。『上海毎日新聞』は五月九日付第六面に特集記事を組み、出品内容を詳しく紹介するとともに、飯島正男の「美展開催に就て」を掲載した。<sup>(43)</sup>このころ、教育部美展出品作品を日本で展覧する計画があつたようである。『申報』は五月

八日(第十二面)、「教育部美術品將参加日展覽会」の見出しで、教育部美展はすでに閉会したが、すべての陳列品は吳淞路七十七号の上海毎日新聞社五階で開催される日本出品展覽会に参加する予定であり、また将来日本に運んで公開する計画である、と報道した。

毎日ホールでの開催に因んで、『上海毎日新聞』は五月十日、次のような記事を掲載した。

#### 画展漫語

▽上海はいろいろな画家展覽会が行われる所は、地方では他に比類がない様である。それは上海に來た画家がきまつてその置土産を賣つて、彼等の旅費を稼いで行くからでもある。

▽随つて上海はいろいろな画家の絵が沢山散在している所も少い。しかもその絵は随分安い値段で相当な画家のものを手に入れているらしい。今度の出品展になると、絵の値段は当地で開催される夥しい展覽会の絵の賣価にくらべてズンと桁が違っている。それだけ出品物はその画家会心の作品ばかりであるから、画展に中毒気味であるらしい上海人にも、眼のさめる様な氣で見物できるべき筈。

▽中国美術展の会場では、あの狭くて暗い部屋に寺内萬治郎氏の百号の「鏡」を置いたり、明るすぎて困る大部屋に、小品と二十五号程度のものを多数揃えてしまつたりして、陳列の具合が悪く、引立つ絵がとんと見劣りしたものあり。折角の大幅が目近すぎたりして困つたものであつたが、本社の会場設備係りでは、日本内地に於て各地の展覽会場で深い経験のある専門家を以てして陳列に当らしめ、之等の非難を少なからしめることに努力した……。

出品協会は当初、中日絵画聯合展覽会の例から推して、出品作品の相当数が上海で賣約になると見込んでいたようである。ところが、教育部美展では一点も賣れなかった。そこで急遽上海居留邦人を対象にした上海展を企画し、それが毎日ホールでの展覽となつたというのが実情であろう。しかし、毎日ホールでも結局賣約がついたのは、大橋孝吉「上高地ノ清流」、満谷国四郎「高原」、岡田三郎助「湖辺」、吉村芳松「薔薇」、和田英作「薔薇花」、南薫造「海岸」、小林万吾「高原ノ春」の七点で、「殘部七十五点ハ木箱八個詰トシ東京美術学校文庫宛ニテ五月十九日、当地發阿蘇丸ニ積込ミ返送」された。<sup>(44)</sup>なお、教育部美展に上海をはじめ中国在住日本人が出品したかどうかは明らかでない。

(二〇〇五・三・二)

註

- (1) 『美術研究』第三百四十九号、平成三年三月
- (2) 『美展特刊』(今部、古部の一帙二冊) 正藝社、中華民國十八年十一月刊。なお、本書には精裝本、平裝本の二種がある。
- (3) 『申報』は上海の中國茶貿易商英國人メージャー F. May (中国名、美查) が、上海で一八七二年四月三十日(同治十一年三月二十三日)に創刊、一九一二年に『時報』の主筆史量才(一八八〇—一九三四)が買い取り、以後中國人の経営となつた。一九四九年五月、中共軍の上海占領によつて同月二十七日付を最後に廃刊されるまで七十八年間發行された。同索引については、『中國近現代文化研究』第四号(同研究会、二〇〇一年十二月刊)所載、拙稿『申報』の「こと」を参照されたい。また上海の王震氏は、筆者たちの作業とはまったく別に、『申報』全紙および上海の他の新聞、さらに膨大な上海出版の美術關係図書、雜誌から美術關係記事を拾い、百五十万字におよぶ『二十世紀上海美術年表』(上海書畫出版社、二〇〇五年一月刊)を出版されたことを紹介しておきたい。
- (4) 劉海粟(りゅう かいぞく) 一八九六—一九九四 画家・美術教育家。江蘇省武

進の人、号は海翁、十四歳で西洋画を学び、十六歳のとき、烏始光と上海図画美術院（上海美術専科學校の前身）を創設、民国期における洋画の発展に尽くした。

(5) 『新教育』第十一卷第二期 新教育共進社、民国十四年

(6) 『中国近七十年來教育記事』（商務印書館、民国二十四年五月刊）一五〇ページ、また『申報』一九二七年十一月二十八日第八面

(7) 『申報』一九二八年二月二十七日第七面

(8) 『申報』一九二八年五月十一日第十面、また趙力・余丁編著『中国油画文献一五四二—二〇〇〇』（湖南美術出版社、二〇〇二年十二月刊）五三五ページ

(9) 『申報』一九二八年六月五日第十二面、以下引用に当たって明らかな誤字は正した。

(10) おかもと いっさく 大分県出身、明治二十二年生れ。明治四十一年錦城中學卒、外務省雇から進んで、在長沙領事館外務書記生、天津副領事を経て昭和二年から南京領事。

(11) よないやま つねお 青森県出身、明治二十一年生れ。東亜同文書院商務科卒、外務省に入り北京に留学、広東、天津、濟南在勤を経て昭和三年七月から杭州在勤。

(12) 外務省外交史料館蔵・外務省記録『展覧会関係雑件』第七卷所収「普通第二三三三三 号 大学院美術展覧会二関シ回報ノ件」

(13) 蔡元培（さい げんはい）一八六八—一九四〇 学者、教育者。浙江省紹興の人。号は孑民、二十三歳で進士に合格、翰林院庶吉士となったが、戊戌変法（一八九八年）後、官を辞し、新学校による青年教育を志した。〇七年ドイツに留学、辛亥革命直前に帰国、中華民国初代教育総長に就任したが、七ヶ月で辞職、フランスで留仏苦学生団を組織し、リヨンに中法大学を創設した。十六年に帰国して北京大学総長に就任。早くから美育の重要性を説いた。

(14) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「普通送第四〇三三三 号 大学院美術展覧会二関スル件」

(15) 王月芝（おう げっし）一八九五—一九三七 台湾台中の人。原名は劉錦堂。一九一四年台湾總督府國語學校師範科卒、十五年十二月來日して川端画學校に入り、翌十六年三月東京美術學校西洋画科に入学、一九二一年三月に卒業すると、上海に行き、国民党元老王法勤の養子となり、王悦之と改名、月芝と号した。北京大学文學院に学び、のち国立北京美術學校西画教授、国立西湖藝術院西画教授、京華美術專科學校長、北平美術專科學校長などを歴任、北京で没。教育部美展第一次、第二次に出品した。

(16) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「普通第二四九号 大学院美術展覧會邦人出品方ニ関スル件」

(17) 正木直彦『十三松堂日記』（中央公論美術出版、昭和四十年刊）第二卷六二八ページ

「十一月一日……外務省書記官岩村成允氏來り対支文化事業部長の意を伝へて云、支那の南京政府より來年一月一日に南京に於て美術展覧會を開催するの意図あり、海外の出品を歓迎す、殊に我國の出陳を希望するよしを特使を以て我在支官憲に申出て我外務大臣に内申して十分此事に就て援助を与へらるゝを適宜の処置と認むと申出たり、外務省にても此際十分の厚意を以て出品を執計らひ置くことは將來我邦の美術の爲にも有益ならんと思ふに付余に此事の遂行に付尽力を乞ふとの事也……」

(18) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和3 一四九四一 暗 第六八号」

(19) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「大学院美術展覧会二関スル件」

(20) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収

(21) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第六卷所収「日支聯合絵画展覧会二関スル協議會」

(22) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和3 一五六九六 暗 第六七九号」

(23) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和3 一五九三一 暗 第七二七号」

(24) 『申報』一九二八年十二月九日第十四面「教育部籌設美術展覧會」

(25) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和4 六三三 暗 第一号（至急）」

(26) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和4 三二五 暗 第二号」

(27) 『申報』一九二九年一月二十七日第六面、本稿末に付載

(28) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「支那教育部美術展覧會出品ニ関スル協議會」、また『十三松堂日記』第二卷六四四ページ

(29) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収

(30) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷に各紙記事の切抜きを収める。

(31) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷に綴込み

(32) 『十三松堂日記』第二卷六五四ページ

(33) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和四年三月一日上野精養軒ニ於

ケル支那教育部美術展覧会出品協会委員招待ノ概要」

- (34) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収
- (35) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和4 暗 第一三六号」および「文化普通六七号 教育部美術展覧会ニ関スル件」
- (36) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「略 第一七五号」
- (37) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「平第二〇六号 支那教育部美術展覧会出陳ニ関スル件」
- (38) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収
- (39) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「昭和4 四九四六 暗 第四三八号」
- (40) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「公信第四一〇号 全国美術展覧会開会ニ関シ報告ノ件」
- (41) 『申報』一九二九年四月十五日第十面
- (42) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「公信第四九九号 国民政府教育部主催ノ全国美術展覧会ニ関スル件」
- (43) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷に記事切抜きを綴込み
- (44) 外交史料館蔵『展覧会関係雑件』第七卷所収「機密第五六五号 美術展覧会日本側出品洋画返送ノ件」

補訂

拙稿「日華（中日）絵画聯合展覧会について―近百年來中国絵画史研究 七―」本誌第三百八十三号で、上海で石野哲弘が設立した中日美術協会の「『中日美術』は一九二〇年の協会発足当初は『中日絵画月報』として刊行され」たと記したが、東京文化財研究所鈴木廣之氏から同月報は正しくは『中日美術月報』であること、ならびに創刊号が同研究所に所蔵されている旨、示教を得た。鈴木氏のご教示をもとに訂正し補っておきたい。

『中日美術月報』創刊号は、大正十一年（一九二二）三月一日発行、縦三十九センチ、横二十六・八センチ、全十ページ。編集兼発行人は上海呉淞路三一五六号石野哲弘、発行所は上海呉淞路三一五六号中日絵画協会、題字は書家として知られる天台山農劉青の書。第一ページは山田岳陽の「中日美術月報発刊の辞」、二ページは上海公論社長渡辺天洋、劉海粟の祝辞、王亞塵の発刊感想、蔡元培、李建勳による劉海粟紹介文、王廷珏の短文、三ページは諸宗元の「缶廬先生小伝」、無署名の「高其佩先生」と山水図版、解縉の略伝と書の図版、四ページは中日絵画協会主催の「日本聯合美術展覧会開催に就て」、五―八ページは「祝呉杏芬女士古稀華誕」特集記事と記念作品頒布要項（作品図版掲載）、九ページは「中日俳句」、随筆、上海の画家の動静など、十ページは中日絵画協会営業部の事業内容の宣伝に宛てられていること付記しておきたい。ご教示下さった鈴木廣之氏に御礼申し上げます。





湖邊	一〇號	岡田三郎助	五〇〇	金閣寺林泉	一〇號	山下新太郎	七〇〇	横臥	一二號	鈴木亞夫	一五〇
淺間山	二五號	金山平三	(空白)	夜	八號	熊谷守一	二四〇	佛蘭西風景	一五號	兒島善三郎	三七五
晩夏	一〇號	辻永	三五〇	花	一五號	黒田重太郎	三五〇	豹の檻	八〇號	鈴木保徳	一〇〇〇
湖畔の秋	二五號	辻永	八〇〇	老大人像	二五號	湯浅一郎	非賣	女	五〇號	田口省吾	八〇〇
肖像	五〇號	清水良雄	非賣	赤のコスチュウム	一五號	正宗得三郎	一〇〇〇	静物	三〇號	吉田卓	六〇〇
薔薇花	四號	和田英作	二五〇	麻雀	二〇號	石井柏亭	非賣	歸牧	七〇號	小杉未醒	二〇〇〇
高原	二〇號	満谷國四郎	一、五〇〇	少女	二〇號	山下新太郎	一〇〇〇	芍薬	一五號	山本鼎	非賣
午睡	三〇號	和田三造	非賣	海棠と木蓮	一二號	安井曾太郎	六〇〇	奈良初秋	二〇號	足立源一郎	七〇〇
朱衣婦人像	二五號	大久保作次郎	非賣	映畫撮影	二五號	中川紀元	五〇〇	花と子供	一〇號	山崎省三	三〇〇
自畫像	一〇號	青山熊治	非賣	谷間	八號	横井禮市	二〇〇	竝木の冬	二〇號	小林徳三郎	非賣
カナベに凭る	一五號	太田三郎	五〇〇	熟稻	五〇號	坂本繁二郎	一、二〇〇	鯛と水仙	八號	岡本一平	三五〇
夏の日	四〇號	吉田苞	七〇〇	蓮池	二〇號	津田青楓	五〇〇	あるピエロ	一〇號	梅原龍三郎	非賣
巴里郊外風景	一二號	相馬其一	二五〇	女	二五號	里見勝藏	五〇〇	プラターヌの廣場	四〇號	鬼頭薺二郎	六〇〇
鏡を持てる女	一二號	大野隆徳	四〇〇	編物	五〇號	小島善太郎	八〇〇	婦人	一二號	山脇信徳	一、〇〇〇
背面の婦人	五〇號	高村眞夫	一、五〇〇	庭さき	一五號	東郷青兒	二〇〇	巴里ノートルダム寺の朝霧	二五號	川島理一郎	非賣
舞妓	一二號	中澤弘光	四〇〇	薔薇	一〇號	植原久和代	二五〇	巴里チュレリーの夏	六號	椿貞雄	三五〇
ダリヤ	一二號	奥瀬英三	三五〇	梅園	一〇號	鍋井克之	三〇〇	朝子盛装圖	二五號	河野通勢	一、二〇〇
鏡	一〇〇號	寺内萬治郎	二、〇〇〇	小鴨と玉葱	八號	林武	一二〇	花	三〇號	大橋孝吉	二〇〇
薔薇	一〇號	吉村芳松	三三〇	秋海棠(水彩)	小判全紙	河上左京	一五〇	上高地の清流	一五號		
水車場	二〇號	石井柏亭	七〇〇	食事	五〇號	椎塚猪知雄	三〇〇				
蔬菜静物	一五號	小出楢重	五〇〇	蝸牛のゐる田舎	三〇號	古賀春江	四〇〇				

## 付載一、「中華民国大学院美術展覽会規章」

## 一、「中華民国大学院美術展覽会組織大綱」

第一条 本会宗旨在匯集全国美術作品、定期展覽、喚起國人對於美術之注意

第二条 本会以大学院院長為當然會長、藝術教育委員會秘書為當然秘書、商承會長處理  
本会一切進行事宜

第三条 本会設籌備委員會、辦理每期展覽會籌備事宜、設審查委員會、辦理每期展覽會  
出品審查及獎勵事宜、其組織大綱另定之

第四条 本會委員均由大学院美術展覽會會長、每年聘請之

第五条 本會各主任、凡不屬於大学院直轄機關者、在服務時期、得由本會酌量情形、與  
以相當之酬勞費、其辦法由本會會長決定之

第六条 本會展覽會、每年至少舉行一次、其展覽時期及地点、第一次由大学院決定、自  
第二次起由本會直接決定之

第七条 本會關於美術作品之徵集、以左列各項為標準

- 一 繪画
- 二 彫塑
- 三 建築圖型
- 四 圖案
- 五 其他美術作品

第八条 本會經常費及獎勵金、由大学院直接擔任

第九条 本大綱、經由大学院核定後施行

## 二、「大学院美術展覽會籌備委員會組織大綱」

- 第一條 本會直隸於中華民國大学院美術展覽會，辦理每期展覽會籌備事宜
- 第二條 本會設主任一人，總理本會一切進行事宜
- 第三條 本會分文書事務組、徵集組、出版宣傳組及指導組，每組各設主任一人、委員若干人，分理本會各項事宜，其辦事細則另訂之
- 第四條 本會主任及委員，均由大学院美術展覽會會長聘任之
- 第五條 本會各組，以展覽會開會前一月起，至閉會後一月止，為正式服務時期，在此期限前後由藝術教育委員會派人兼辦
- 第六條 各組為事務進行便利，起見得組織，各組聯席會議，其辦法另定之
- 第七條 本大綱，經大学院美術展覽會會長核定後施行

## 三、「大学院美術展覽會審查委員會組織大綱」

- 第一條 本會直隸於中華民國大学院美術展覽會，辦理每期展覽會出品審查及獎勵事宜
- 第二條 本會設主任一人，總理本會一切審查及獎勵事宜
- 第三條 關於出品審查事項，由本會主任會同全体委員處理之
- 第四條 關於出品獎勵事項，由美展會長・本會主任會同全体委員處理
- 第五條 出品審查及獎勵簡章，另定之
- 第六條 本會主任及委員，均由大学院美術展覽會會長聘任之
- 第七條 本會以開會前一月至閉會時止，為正式服務時期
- 第八條 本大綱，經大学院美術展覽會會長核定後施行

## 四、「中華民國大学院美術展覽會徵集出品簡章」

- 第一條 本會徵集種類、分繪畫・彫塑・建築圖型・圖案及其他美術品，均以新近作品為限
- 第二條 作品經本會審查委員會取錄後，始得陳列，但本會委員及特約者之出品不在此限
- 第三條 每人應徵出品，至多不得過二十件
- 第四條 應徵出品一切裝璜鏡框，均須自行配置整齊
- 第五條 應徵出品，務須在各該件背面左下角，註明品名・種類及作者姓氏，以便檢查核對
- 第六條 應徵出品，按件徵收手續費大洋二角，取錄與否概不退還，但本會委員及特約者之出品免半費，海外出品者免全費
- 第七條 經本會審查委員會審查取錄之作品，按件徵收陳列費大洋二角，本會委員及特

約者之作品免半費，海外出品者免全費

- 第八條 應徵出品如運到時，已過截止時期，不及列入本展覽會目錄者，本會概不負責
- 第九條 應徵出品運到後，如與原表件數不符，由本會隨時通知原作者，以憑攷核
- 第十條 應徵出品寄來郵運費由出品者擔負，發還時由本會擔負
- 第十一條 應徵出品，得由本會呈請大学院，轉商交通部免除關稅
- 第十二條 應徵出品出售後，得由本會依照實價，抽所得稅百分之十
- 第十三條 應徵出品，除天災及偶然損傷，本會不能負責外，如有盜竊等情，俟本會閉幕後，由審查委員會酌量情形處理之，出品者不得故意要挾
- 第十四條 本條例，經大学院美術展覽會會長核定後施行

## 五、「中華民國大学院美術展覽會獎勵出品簡章」

- 第一條 本會獎勵出品辦法，分收置作品、給予獎章、給予獎狀三種
- 第二條 收置作品，以作品為單位，給予獎章・獎狀，以作家為單位
- 第三條 應徵出品為本會收買者，送歸國立美術院陳列之
- 第四條 收買作品，每一作家不得超過兩件以上
- 第五條 收買作品之價格，經審查委員會評定及美展會長同意後，並得徵求原作者之同意
- 第六條 應行獎勵作品，須由審查委員會評定，經美展會長同意，其獎勵手續，以美展會長名義施行之
- 第七條 本會獎章額數，每次規定金質獎章八枚，銀質獎章十六枚，獎狀三十二件
- 第八條 應徵出品如有特別優良，為本會經濟力所不及收買，而經原作者惠贈本會作為紀念者，得由本會呈請大学院特別嘉獎，並將此項作品，送歸國立美術館陳列之
- 第九條 本會於展覽會閉幕後，擇定相當期間舉行給獎大會，一切獎勵均於該會舉行之
- 第十條 本條例，經大学院美術展覽會會長核定後施行

## 付載二、「教育部全國美術展覽會徵集出品細則」

- 第一條 本會出品，分下列各部
  - 第一部 書畫（書法・繪畫）
  - 第二部 金石（篆刻・拓本・仿古）
  - 第三部 西畫（油畫・水彩・素描・粉畫）
  - 第四部 彫塑（彫刻・鑄金・塑造）
  - 第五部 建築（圖樣・模型）
  - 第六部 美術工藝（圖案・織繡・樂器・磁器・漆器・竹木器・牙器・金玉

器・玻璃器・製版及文具等)

第七部 攝影(美術攝影)

第八部 參考品(古代書畫。近人遺作。國外繪畫彫塑)

第二條 凡中華民國國民及各國僑居本國之美術家、皆得以其作品應徵、但以創作為限

第三條 凡收藏家、皆得以其收藏品應徵為參考品

第四條 特約出品、由本會通函徵求、不經審查

第五條 普通出品、由作家自行應徵、但須經本會審查後陳列

第六條 應徵出品、每人每部以五件為限(但第六第八兩部、以每類計算)

第七條 應徵出品、均須由出品人自行裝璜

第八條 應徵出品於交件時、須繳手續費大洋兩角、陳列費大洋兩角、但特約出品及參考品均得免繳陳列費

第九條 應徵出品之運送費用、概歸出品人自理、但參考品不在此例

第十條 應徵出品運到時、如檢查結果與原表件數不符、由本會隨時報告出品者、以憑

考核

第十一條 應徵出品運到時、由會中檢查、如有中途損壞、本會概不負責

第十二條 應徵出品經審查會落選之件、得將已繳之陳列費領回、但手續費概不退還

第十三條 應徵出品出售后、本會得按定價提取百分之二十

第十四條 本會各部出品當由本會盡責保管、如有天災意外損失為人力所不能抗者、概不負責

第十五條 應徵出品、一律須於三月五日以前送到本會徵集組、換取收據

第十六條 應徵出品經審查後、入選與否由會中通告出品人

第十七條 應徵出品經審查後落選之件、一律於開會前十日內憑收據發還、入選之件一律於閉會後十日內憑收據發還

第十八條 每件均須由出品人自行按照下列票籤格式顯明、貼上以憑檢核(第〇部〇〇出品

品 姓名 題目 價格)

【申報】一九二九年一月二十七日第六面「教育部全國美術展覽會通告第一号」から